

アザメの瀬自然再生事業に対する地域住民の評価に関する研究

福岡大学大学院 建設工学専攻 学生員 ○大坪摩耶

福岡大学工学部 社会デザイン工学科 正会員 皆川朋子, 山崎惟義, 渡辺亮一, 伊豫岡宏樹

1.はじめに

国土開発に伴う自然環境の改変が進み、自然と共生する社会の実現と地球環境の保全が重要な課題となり、2002年12月には、過去に損なわれた生態系その他の自然環境を取り戻すことを目的とした自然再生推進法が施行された。河川、海岸においても、湿地の再生、蛇行河川の復元、干潟・藻場の保全・再生など様々な取組が進められている。自然再生推進法では、関係行政機関、関係地方公共団体、地域住民、特定非営利活動団体、専門家等の地域の多様な主体が参加して、自然環境の保全、再生、創出、維持管理するとされている。昨今の厳しい財政事業の中、自然再生事業は住民に受け入れられているのだろうか？ 自然再生事業では、地域の自主性・主体性を尊重したボトムアップの考え方が採用されている¹⁾。そのため、自然再生に果たす住民の役割は大きく、住民の評価は今後の自然再生の取り組みに影響を及ぼすものと考えられる。

自然再生に対する住民の評価に関しては、自然環境に対する評価と同様に年齢や自然体験等が影響する²⁾³⁾と考えられる他、事業者による住民参画のプロセスや、住民と自然再生事業との関わりも評価に影響を与えるものと考えられる。しかし、近年実施されるようになった自然再生事業を対象に住民の評価に関する知見は限られている。

そこで本研究では、自然再生事業に対する住民の評価やその要因や課題を明らかにするため、松浦川で実施されたアザメの瀬自然再生事業をケーススタディとして地域住民に対しアンケート調査を行った。

2. 「アザメの瀬自然再生事業」の概要

松浦川は、佐賀県武雄市を源流に玄界灘に注ぐ延長47kmの河川である。アザメの瀬自然再生事業では、築堤や河川改修で失われてきた氾濫原湿地の再生及び人と生物のふれあいの再生を目的に、中流域の「アザメの瀬」地区（河口から15.8km、面積6ha）の河道右岸側水田を取得して地盤を掘り下げ、本流と連続するクリークや増水時に本流と連続するワンドが造成された（図-1、写真-1）。本事業は、事業者が計画立案した後、住民の了承を得るといった従来の手法とは異なり、計画から工事後の維持管理に至るまで、事業実施者（国土交通省武雄河川事務所）と地域住民とが対話（検討会）を繰り返しながら進められたことが特徴としてあげられる。現在でも検討会は継続され、環境教育や維持管理が協働で実施されている⁴⁾。



図-1 アザメの瀬及びアンケート対象地区



写真-1 アザメの瀬（松浦川）
（武雄河川事務所撮影）

3. 調査方法

対象地区のある唐津市相知町及びその周辺地域（唐津市、伊万里市）の14地区計1360世帯を対象にアンケート調査を実施した（表-1）。設問項目は主に、①回答者の属性（年齢、性別、住居地区）、②川との関係（水害被害、川で遊んだ経験の有無）、③自然環境に対する関

表-1 アンケート調査対象地

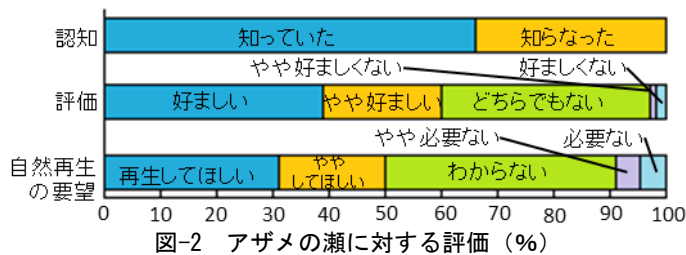
市・町名	地区名	配布世帯数	回収票数
唐津市	相知町 佐里上	69	95
	佐里下	116	153
	杉野	92	123
	町切	93	118
	高見台	76	139
	伊岐佐上	70	106
	水主町	100	77
伊万里市	西寺町	117	120
	北波多	98	156
	穉田1区	74	110
	厳木町 簗木	74	110
	松浦町 下分地区	173	254
	大川町 駒鳴	89	53
	宿	136	108
	山口	57	63
計		1360	1675

心の程度、④アザメの瀬再生事業の認知、⑤評価（好ましいか、目的に対する賛同）、⑥利用及び利用目的、⑦自然再生の他地域での要望、⑧アザメの瀬に対する考え、整備・要望等とした。調査票の配布・回収は、武雄河川事務所を通し各地区に依頼し行った（2011年2月～3月）。なお、アザメの瀬自然再生事業に関する説明資料として、事業者が作成した副読本「みんなで学ぼうアザメの瀬」を調査票とともに各世帯に配布した。調査票は各世帯4票配布し、計1675票回収された。

4. 結果及び考察

4.1 アザメの瀬に対する評価

アザメの瀬の認知については、回答者の66%が認知しており、比較的高かった。2003年に皆川らが同地域を対象に実施した調査結果36%（未発表データ）と比較すると約2倍に増加していた。アザメの瀬の評価については、61%が「好ましい、やや好ましい」と回答し、「好ましくない、やや好ましくない」はわずか3%であった。目的に対する賛同については67%が「賛成できる、やや賛成できる」と回答した。2003年の結果では「望ましい」48%、「目的への賛同」45%と比較す



ると増加しており、本自然再生事業は住民に受け入れられていると考えられる。

利用に関しては、33%が「アザメの瀬に行ったことがある」と回答し、主に散歩、自然観察、魚とり、子供に自然体験させるために利用されていた。回答者の1/3が訪れており、利用率は比較的高いと考えられた。

自然再生に対する要望については、他地域も「自然再生してほしい」「やや再生してほしい」が50%であったのに対し、「必要ない」は9%であった(図-2)。対象地域は、比較的自然が多く残されている地域ではあるが、自然再生に対する要望は少なくないと考えられる。その背景には、2008年に生物多様性基本法が施行等によって、国民の自然環境の保全・再生に対する意識が高まっている可能性が示唆された。

4.2 認知や評価に影響を与えている要因

4.1に示したアザメの瀬に対する認知、評価、及び自然再生に対する要望、に対する基本属性(年齢、性別、住居地域)、川との関わり(水害被害、川遊びの経験の有無)、自然環境への関心の程度の影響を評価するため、 χ^2 検定、Kruskal-Wallis test、または、Mann-Whitney's U testを用いて検定した(危険率1%)。その結果、認知に関してはすべての項目、評価は、水害被害、川遊びの経験、自然環境への関心、自然再生に対する要望に関しては、住居地域、川遊びの経験、自然環境への関心において有意差が検出された(表-2)。川遊びの経験や自然環境への関心については、すべての項目に共通して影響を及ぼしている要因であった。回答者の88%が川遊びの経験があり、78%が自然環境に関心があることが、アザメの瀬に対する比較的高い認知や評価をもたらしたのと考えられた。

4.3 課題

アザメの瀬自評価において「好ましくない」、他地域での自然再生に対する要望について「自然再生してほしくない」と回答した人の評価理由、「アザメの瀬に対する考え、整備・要望」から抽出したアザメの瀬の課題を以下に示す。

- ①「コストがどれくらいなのか」、「税金の無駄になる整備はしてほしくない」、「自然環境ばかりが重視され、治水等が手遅れになるのは困る」等の意見がみられ、示が望まれた。
- ②「工事により、元々あった環境を破壊するのではな

表-2 各評価と要因の関係に関する検定結果

	基本属性			水辺との関わり		自然環境への関心
	年齢	性別	住居地域	水害被害	川遊びの経験	
認知	<0.001 (C)	<0.001 (C)	<0.001 (C)	<0.001 (C)	<0.001 (C)	<0.001 (C)
評価	0.049 (K)	0.031 (M)	0.057 (K)	0.003 (M)	<0.001 (M)	<0.001 (M)
自然再生への要望	0.116 (K)	0.013 (M)	0.007 (K)	0.429 (M)	<0.001 (M)	<0.001 (M)

(C): χ^2 検定, (K):Kruskal-Wallis test, (M):Mann-Whitney' s U

いか」、「実際に生息する生物の種類など詳細な記述が欲しい」等の意見がみられ、過去からの自然環境の経緯を示した上での自然再生事業の必要性や自然環境や動植物に関する情報の提供が必要であると考えられた。

以上は、自然再生を行って上での重要な課題であると考えられた。

この他、「アザメの瀬の場所を詳しく知りたい」、「どんなイベントが行われているのか」という意見がみられる等、広報に関する課題があげられた。

5. まとめ

本研究では、自然再生事業に対する住民の評価やその要因を明らかにするため、松浦川で実施されたアザメの瀬自然再生事業を対象に地域住民に対しアンケート調査を行った。その結果、回答者の66%が認知し、61%が事業を評価しており、自然再生事業が地域住民に概ね受け入れられていると考えられた。これらは、本地域の多くが川遊びの経験を有し、自然環境への関心が高かったことが影響しているものと考えられた。また、自然環境が比較的多く残る地域にも関わらず50%が他地域においても自然再生を望んでいた。しかし、継続的な自然再生の展開を図っていくためには、自然再生事業の費用対効果や自然再生が必要な背景等に関する情報提供が必要であることが示唆された。今後さらに他地域でも同様の調査を行い、自然再生事業に対する評価を明らかにしていきたいと考えている。

謝辞

アンケート調査の回答、調査票の配布・回収において、唐津市、伊万里市、及び国土交通省武雄河川事務所の方々には多大なるご協力頂きました。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 1) 亀澤玲治：市民と行政との協働による自然再生事業の基礎知識、自然再生事業、築地書館、2003。
- 2) 山下三平・元永秀・田中繁之・坂本紘二・平野宗夫、「水辺に関する履歴に基づいた住民の都市河川評価と利用頻度の分析」、水工学論文、1990。
- 3) 皆川朋子・島谷幸宏：住民による自然環境評価と情報の影響—多摩川永田地区における河原の復元に向けて—、土木学会論文集、2001。
- 4) アザメの瀬検討会：アザメの瀬の記録、2011。